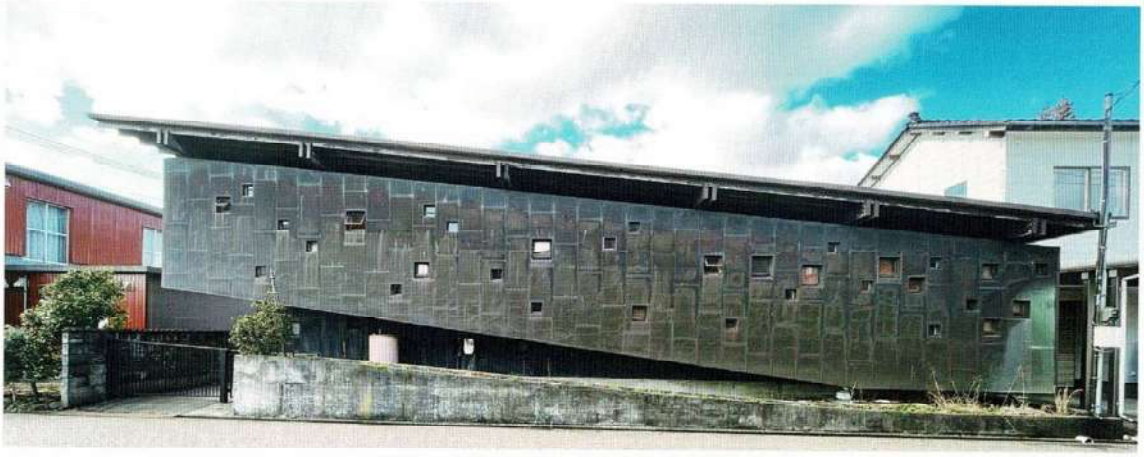
◆上越出身の世界的建築家 渡邊洋治生誕100周年記念

「斜めの家」を理解せずに上越の建築文化を語るなかれ

ナナメの会主催　建築家　中野一敏



斜めの家北側外観（上越市春日地区）　中野一敏：撮影

挑発的なタイトルだと思う人もいるだろう。しかし私には、渡邊洋治（一九二三―一九八三）が「斜めの家を理解せずに、上越の建築文化を語るなかれ」と言っているように思える。上越の建築文化とは、現在進行形の私たちの時代の建築文化を意味している。古い文化財になると、過去の建築文化の遺産であって、現代の建築文化に直接つながって来ない。「斜めの家」は、上越の現代の建築文化に直接つながった、いわば原点だと考えている。

「斜めの家」は、渡邊洋治が妹夫婦のために設計し、一九七六年に完成した住宅で、上越市に残っている。渡邊洋治が設計し実現した最後の建築物にあたる。渡邊洋治って誰？と思う読者もおられると思う。渡邊洋治の経歴については後で触れるとして、とりあえずは上越出身の世界的に名の知れた建築家であると理解していただいて読み進めてほしい。

私は二〇一三年に、「斜めの家」を保存活用する有志の会に建築専門家としてお声がけいただき参加することになった。その活動の様子は、〈渡邊洋治『斜めの家』再生プロジェクト〉というFacebookページで公開してきた。

活動の発端は、渡邊洋治の親族である所有者の「渡邊洋治の建築作品を建築に興味のある人々に広く見ていただきたい」という想いがもとになり、それに賛同した橋本桂子さん（一九七二―二〇二〇）がプロジェクトを立ち上げたのである。

橋本さんに声をかけていただいたのは、新潟市に向かう高速バスの中だった、大学で絵画を専攻した橋本さんとは以前から面識はあったのだが、同じ高速バスにたまたま乗り合わせていたのである。なぜかその時の印象をよく覚えているのだが、それは橋本さんが―斜めの家のことを誰に声をかけたらいいか―と、きっとモヤモヤした状態だったのだと思う。大きな可能性を秘めているが、他に類似の事例が少なく、理解しあうことが困難なプロジェクトだと感じていたのではないだろうか。

このプロジェクトの困難さとはなにか。

橋本さんが初めて「斜めの家」を訪れた二〇一〇年、空き家になっていた「斜めの家」に購入希望者が現れ、新たな住人の要望に沿ってリフォーム工事計画が進行していた。しかし、この計画は渡邊洋治の親族である現在の所有者の申し出によって寸前で取りやめになった。リフォーム工事によって、渡邊洋治が設計した「斜めの家」のオリジナル性が大きく損なわれてしまうことを思案されてのことであった。

普通、空き家になった古い住宅に、購入希望者が見つかることは喜ばしいことである。そして、新たな住人の要望でリフォーム工事が行われることはめずらしくない。寸前で取りやめとなったこの計画を進めていた建築関係者も、良かれと思って計画を行っていたに違いない。さらに言えば、建築関係者の仕事は、そうした行為から生まれるのが普通である。

建築の専門知識のない橋本さんは、建築関係者に協力を求めたいが、普通の建築関係者には、このプロジェクトの意図が理解できないのではないかと、モヤモヤしていたように思えるのだ。

渡邊洋治の親族である所有者が、洋治が設計した「斜めの家」のオリジナル性にこだわるのは、「斜めの家」が彼の作品として、建築関係者に十分に吟味されていないと感じたからであろう。「斜めの家」は、洋治が亡くなってから編まれた「渡邊洋治建築作品集」に掲載されているが、生前、建築雑誌に公表されなかったようで、建築関係者にはあまり知られていない。そして、「斜めの家」がなぜこのようなデザインになっているのか、彼の設計意図も分かっていなかった。

「斜めの家」が、渡邊洋治の作品として知られていなかった事を示すエピソードを紹介したい。建築史が専門で、建築の設計も手掛けている藤森昭信東京大学名誉教授が「斜めの家」を訪れ、「藤森昭信の原・現代住宅再見2」という本に書いたエピソードである。「斜めの家」を訪れる前、こちらは、渡邊洋治の作品として有名な「龍の砦」と呼ばれる住宅作品を訪れ、同シリーズの「藤森昭信の原・現代住宅再見」に書いたところ、渡邊洋治の親族から感謝の手紙が届くと共に「斜めの家」を紹介されたという。そして、二〇〇〇年に渡邊洋治の妹夫婦が住む「斜めの家」を訪れ、少なからずショックを受け、異例であるが、同シリーズに渡邊洋治作品を二度も取り上げたのだという。同書から引用する。

これほどの住宅作品が人知れず立っていようとは。洋治さんといえばナンタッテ、「龍の砦」であり、「軍艦ビル（第三スカイビル）」（一九七〇）であり、四角な箱に収まるような中小住宅なんて、と思ってきた。見るからに激しい表現の「龍」と「軍艦」の両作の陰に隠れてこれまで誰もその重要性に気づかなかった。

（出展：藤森昭信の原・現代住宅再見2　P108）

一九七六年に完成した住宅の重要性に、二〇〇〇年まで建築関係者は気づいていなかったのだという。「斜めの家」の重要性について、同書（P113）には次のように書いている。

これまで、コルビュジエ派の木造住宅というと、レーモンドの「夏の家」（一九三三）、前川國男の「自邸」（一九四一）、増沢洵の「自邸」（一九五二）、吉村順三の「軽井沢の山荘」（一九六二）の四作をもって時期ごとの代表作とし、それでことたれりとしてきたが、そこで終わらず、それに引き継ぐものとして、渡邊洋治の〈斜めの家〉を加えてもいいんじゃあるまいか。

藤森氏によれば、「斜めの家」の重要性はすさまじいものである。コルビュジエ（一八八七―一九六五）は、モダニズム建築の巨匠であり、明治時代に日本が輸入したヨーロッパの古典主義建築の次の様式にあたる、モダニズム建築の確立に大きな影響を与えた建築家である。モダニズム建築は、二〇世紀初頭に世界を席巻し、昭和になると、日本でも優れたモダニズム建築が建てられるようになった。取り上げられた四作品はどれも大変に有名なものであり、コルビュジエの弟子筋によって設計され、日本の現代住宅建築に大きな影響を与えてきた。四作品の最後に取り上げられた建築家で東京藝術大学名誉教授の吉村順三（一九〇八―一九九七）は、その作風を引き継ぐ弟子にも多く大きな影響を与え続けている。藤森氏は、この有名な四作品では足らずに、そこで終わらずに、それを引き継ぐものとして渡邊洋治の「斜めの家」を加えてもいいのではないかと言うのだ。

もうお気づきの方も多いと思うが、渡邊洋治も、コルビュジエの弟子筋にあたる。コルビュジエに師事した日本人建築家で最も若い弟子である吉阪隆正元早稲田大学教授（一九一七―一九八〇）の研究室で、洋治は助手を務め、戦後の現代建築にも大きな影響を与えたコルビュジエの晩年の作品からも影響を受けたのである。

私たちのような上越の建築家は幸いである。大先輩が上越に残した「斜めの家」を深く理解することで、目指すべき主流となる方向性が見えてくるに違いない。上越の建築文化も幸いである。「斜めの家」が示した方向性の先にある、上越の建築家の作品群が足掛かりとなって、未来の上越の建築文化が創造されていくだろう。これが、橋本さんが始めた渡邊洋治設計「斜めの家」再生プロジェクトの秘めた大きな可能性である。

ここで、「渡邊洋治建築作品集」を元に、渡邊洋治の経歴について簡潔に記載しておきたい。

・一九二三年（大正一二）六月一四日、新潟県上越市（旧直江津市）に大工の棟梁の長男として生まれる。祖父は、「いかや八角塔」の棟梁である。

・一九四一年（昭和一六）、高田商工学校（現・県立上越総合技術高等学校）を卒業。日本ステンレス直江津工場に就職。渡辺仁建築工務所・大阪府営繕課勤務の経歴を持つ西田勇という建築家から建築の世界を学ぶ。

太平洋戦争中は船舶兵としてフィリピン・セブ島に入営。幹部候補生試験に合格し帰国。陸軍予備士官学校卒業後、新潟・日本海船舶司令部に勤務。戦後、日本ステンレスに復職した後に上京。

・一九四七～一九五四年（昭和二二～二九）、久米建築事務所（現・久米設計）に勤務。

・一九五五年（昭和三〇）から三年間、早稲田大学吉阪研究室助手を務め、コルビュジエのもとから帰国したば

かりの吉阪隆正に師事する。

・一九五八年（昭和三三）、独立し、渡辺建築事務所を開設。
・一九五九年（昭和三四）、早稲田大学講師になる。
・一九六九年（昭和四四）、最高裁判所庁舎の競技設計で優秀賞を得る。
・一九七〇年（昭和四五）、第三スカイビル（鉄のマンション）が竣工し、国際的に注目を集める。早稲田大学大学院特殊学生となり、一九七三年（昭和四八）まで、講師であり学生として過ごす。
・一九七六年（昭和五一）、斜めの家竣工。
・一九七九年（昭和五四）、ニューヨーク近代美術館の展覧会（Transformation in Modern Architecture）に、善道寺（糸魚川市）と鉄のマンションを出品する。
・一九八三年（昭和五八）、アメリカ・モンタナ州立大学、ニュージーランド・オークランド大学で招聘講演を行う。
・一九八三年（昭和五八）一一月二日に急逝。享年六〇歳。
・二〇二三（令和五）年は、生誕一〇〇周年。

私は、「斜めの家」がなぜこのようなデザインになっているのか、渡邊洋治の設計意図に興味を持っていた。「斜めの家」の特徴を一言で表せば、「階段の無い、二階建て住宅」である。傾斜のある廊下（スロープ）が、一階から、二階まで、少しずつ地面からの床高が高くなる部屋をつないでいる。廊下の傾斜が、建物の外観の特徴となっており、「斜めの家」と名付けられている。

二〇一三年に、渡邊洋治「斜めの家」再生プロジェクトを始めた頃、上越市の建築関係者の間では、住人の足が悪かったから、このようになっていると言われていた。それはおそらく、新聞誌上での住人の発言がもとになっていると思われる。

階段ではなくスロープを採り入れたのは「老後のことを考えて」という。傾斜度は八分の一こう配（八㍍行って一㍍さがる）で、きわめて緩やか。階段から落ちる心配もないし「とにかくラクです。一、二階の感覚がなくなり、知らぬうちに二階に行ってしまう。階段を上下するおっくうさが消えました」とシデさん。階段の与える一、二階の〝分離感〟はなく、むしろ一体感さえ持つような効果をスロープが生み出している。「お年寄りや小さな子供のいる家にはいいかもしれない」と田中さん。

（出展：「住まい拝見」新潟日報社学芸部）

住人に、このように受け止められていたのは事実のようである。内部を見学して同じような意見を持つ方も多い。一方で、段差を無くしたバリアフリー対応になっているわけではない点と、八分の一勾配が、きわめて緩やかとは言えない点にも注意する必要がある。また、「斜めの家」には、建築された最終案の前に、二つの案がある。それらは、階段のある二階建て住宅であった。したがって、スロープは、設計当初から与えられていた条件ではなかった。現在の所有者によると、設計当時、住人の足は悪くなかったとのことである。おそらく、「老後のことを考えて」というのも、建築家が語った方便であるのだろう。私は、渡邊洋治の設計意図は、他にあるのだろうと思っていた。

二〇一四年から、二〇一六年にかけて、渡邊洋治設計「斜めの家」再生プロジェクトでは、設計当時を知る現代美術家・舟見倹二（一九二五―二〇二〇）氏、「斜めの家」を施工した岩島工務店の岩島氏らにお話をうかがい、記録を取ってきた。

舟見倹二氏によると、渡邊洋治は、「斜めの家」を作る

ころ、「潜水艦」を作ると語っていたという。「軍艦マンション」と呼ばれた新宿の「第三スカイビル」や、「航空母艦」と呼ばれた、直江津の「旧労災病院」と関連する、軍事色のある渡邊洋治らしいモチーフである。渡邊洋治が子供のころ、直江津の海に軍艦が停泊していたというし、戦時中は船舶兵の経験もある。コルビュジエも古い様式を脱して、モダニズム建築をめざす時、「商船」をモデルにしていた。したがって、「船」をモデルにするのは、モダニズム建築の影響下ではめずらしくはないが、軍事色を出すのは、洋治らしい個性だろう。しかし、「斜めの家」は「潜水艦」である。なぜ、沈むのだろうか。後に私は、「船」が「潜水艦」になったことが、彼の建築がモダニズム建築から現代建築へ移行した事を示していると考えるようになる。

一九二〇年代にヨーロッパでコルビュジエらが確立しようとしたモダニズム建築は、今から見れば個人や地域などの特殊性をこえて、世界共通の様式を作ろうとするものであった。戦後から一九七〇年代にかけて、モダニズム建築が各国、各地域へと伝播する中で、地域や個人の特殊性と再び交わり変容する姿が現代建築として現れてきた。

渡邊洋治が生涯に残した作品群（一九五〇～一九八〇年代）も、この時代の流れに沿うように、モダニズム建築の影響がうかがわれる作品から始まり、徐々に個性的、地域的な表現が目立つようになってくる。洋治の個性的表現は、「軍艦」、「龍」などのイメージを建築物に持ち込んだところである。そして、その陰に隠れてしまいがちであるが、当時は裏日本と呼ばれた出身地の地域性を背負っていた。建築評論家の長谷川堯は、次のように書いている。

このような渡邊さんの少年期から青年期にかけての経歴において、後の彼の仕事に関連して私達が注意を払うべきいくつかの要点があると思う。ひとつは、彼自身がいろいろなところでくりかえし述べているように、生誕地が裏日本の多雪地帯にあり、表日本に比較して想像できないほど陰鬱な冬を覚悟しなければならない風土に育ったという点―。

（出展：渡邊洋治論
日本海の怒涛は今も押し寄せる／長谷川堯）

さて、渡邊洋治が「斜めの家」を作るときに語ったという「潜水艦」は何を意味するのだろうか。橋本さんが舟見氏から聞いたところによると、〈田植えされ稲が育つにつれて稲穂の海に建物が沈む。稲刈りが行われると再び建物が浮上する〉という意図があったようである。後日、記録会を開いた際には残念ながら、舟見氏からこの話を確認することが出来なかった。しかし、黄金色に輝く稲穂の海に沈む、銅色に輝く「斜めの家」のイメージは、劇的な美しさがあり、真実味をもって私に迫ってくるように感じられた。渡邊洋治の生まれ育ったこの地の地域性と結びついた表現だと言える。「斜めの家」が出来た頃の写真を確認すると、周囲はすでに宅地化が進んでいるように見える。したがって、稲穂の海に沈む「斜めの家」が、実際に見えたのか、渡邊洋治のイメージの中にのみ存在したのかは、分かっていない。

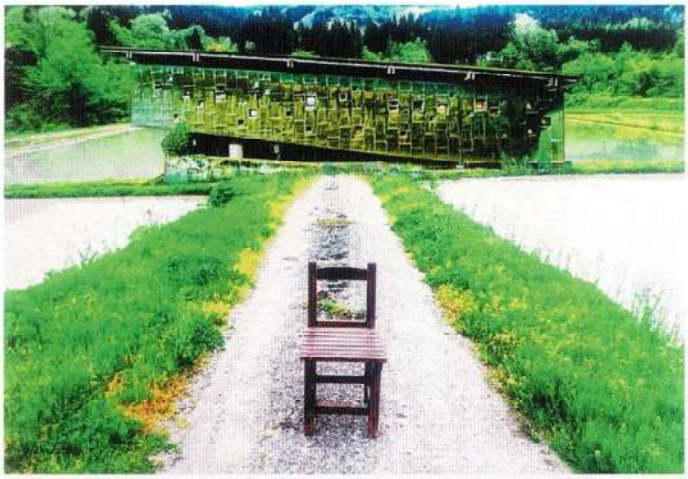
「潜水艦」の意味はそれだけであろうか。渡邊洋治は、上越が多雪地帯であることを意識していた。「斜めの家」は、雪に沈む「潜水艦」でもあったのではないだろうか。

「斜めの家」には、様々な高さに「舷窓」のような小窓が開けられている。「斜めの家」が雪に沈む時、「ああ、こんなに積もったか」と、周囲の雪の高さを確認できるような窓のように感じられる。小窓が、外をのぞき見る行為を意識させるのには理由がある。設計図には、これらの小窓の位置を示す寸法が描かれていない。「斜めの家」を施工した岩島工務店の岩島氏によると、「渡邊洋治は窓をつけるおおよその場所に行って、外に何か見えそうな位置に窓をつけるように指示をした」のだという。

さらに、「斜めの家」の見学会で撮った一枚の写真と、たまたま目にした昭和二八年の高田の雁木通りの写真の類似性に気づいた。「斜めの家」の空間は、雪に沈むことを前提に造られた雁木通りの空間と類似している。やはり、「潜水艦」は雪に沈むことを意味していると思うようになった。

見学会の時に撮ったスロープ空間の写真（次頁上段）を見てほしい。女性が歩いているスロープ空間の左上から子供が頭を出して見下ろしている。この子どもがいるのは、折り返して二階へと上がるスロープ空間であり、スロープの床高は、女性がいるスロープ空間よりも一m以上高くなっている。女性の右上に見える光が差し込む開口部は、二階の部屋の低い位置、床から開けられた地窓である。女性が歩いているスロープ空間の左右には、様々な床高の空間があり、光や風が通り、視線が交錯する立体的で親密な空間が広がっている。

次に、昭和二八年の高田の雁木通りの写真（次頁下段）を見てほしい。雪の積もった通りを男性がソリを引いて行く。それを上からスキーを履いた子供達が見下ろしてい



上　水田に浮かぶ「斜めの家」　作：石田賢一郎

下　積雪時の「斜めの家」　橋本桂子：撮影

る。きっと通りの左右の雁木から見上げる視線もあるだろう。そして、その雁木は、すれ違う人の肩が触れ合う親密な路地空間である。雪が積もった雁木通りには、立体的で親密な空間が広がっていた。「斜めの家」の空間には、渡邊洋治を育んできた空間が投影されているように感じられる。「潜水艦」は、それらを読み解くキーワードであると考えている。

ここで一度「潜水艦」を離れ、「斜めの家」のデザインを見てみたい。コルビュジエは、多くの建築作品でスロープを好んで使っている。ランダムに開けられた小窓も、コルビュジエの建築作品の中に見つけることが出来る。そして、渡邊洋治は、コルビュジエを意識していた。

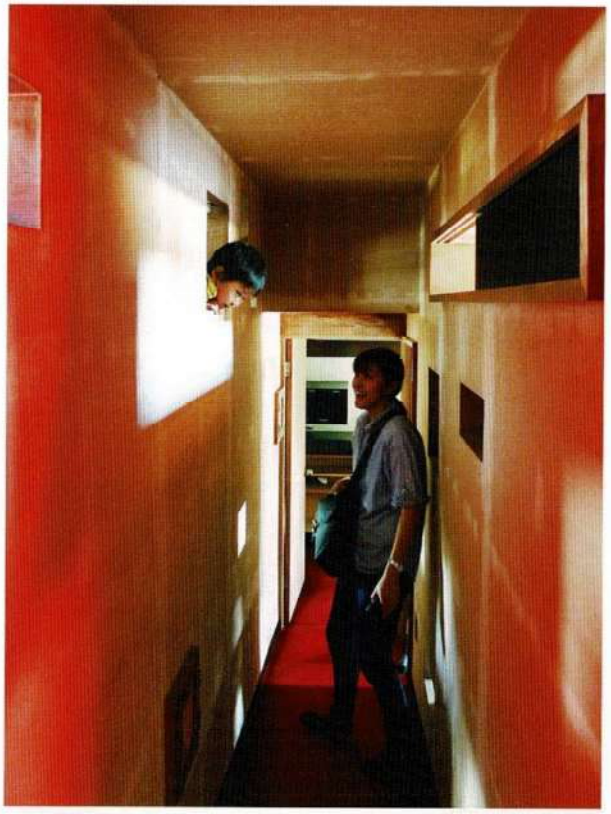
―彼は私の所へとんできて、いよいよコルビュジェを乗り越えることができましたよと誇らかに語った。

―まるでお前もコルビュジェの弟子なら、そのくらいのことを提案して乗りこえて見ろといわんばかりの勢いであったが、学生にこのくらいの元気が欲しいと思う。

（出展：作品批評「龍の砦」に想う／吉阪隆正）

私達は、渡邊洋治が語っていなくとも、コルビュジエ作品との関係を真っ先に考える必要があるだろう。建築関係者を招いた見学会では、そうした話題になることが多かった。中でも、インドの都市チャンディーガルにコルビュジエが造った、「行政庁舎」（一九五八）と呼ばれる建築物のスロープ空間と「斜めの家」のスロープ空間との類似性は、大きな気づきであった。なお、コルビュジエの設計したチャンディーガルの建築群は、コルビュジエ最晩年の作品群にあたる。

渡邊洋治建築作品集によると、一九七四年から一九三八年まで、学生のための密度の高い研修旅行を企画立案し、



上 見学会の時の「斜めの家」スロープ空間　中野一敏：撮影
下 昭和 28 年の高田の雁木通り　岡観容：撮影

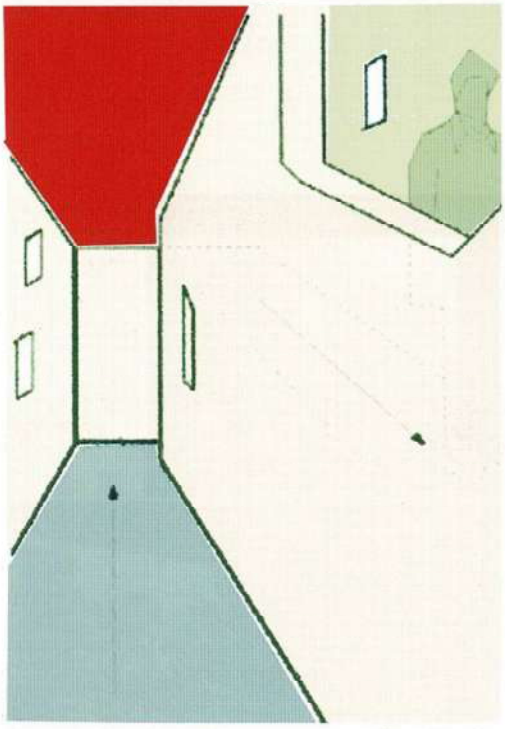
毎年旅行会を引率したという。一九七五年、吉阪隆正（早稲田大学教授）を団長とするチャンディーガル研修旅行が行われており、渡邊洋治（早稲田大学講師）は幹事として名を連ねている。この一九七五年の研修旅行に参加した舟見倹二氏のもとに、旅行で撮影したスライドフィルム、募集要項などの資料が残されており、二〇一五年末に見せていただくことが出来た。

一九七五年の募集要項には、一九七二年、七四年に、一四〇数名でインド各地を歴訪したと書かれており、一九七四年から毎年旅行会を引率したという、渡邊洋治建築作品集の記録と合わせて考えると、一九七四年の旅行にも、洋治が参加していると類推される。一九七四年から、一九七五年は、斜めの家の設計期間にあたる。この時期に渡邊洋治が何を見て、何に興味を持ったかを知る貴重な資料が残されていた。

そして私達は、舟見氏のスライドフィルムに、「行政庁舎」(一九五八)の外観を見つけることが出来た。そこには、スロープ空間の外観もおさめられていた。洋治は、「斜めの家」の設計中に、「行政庁舎」を見たのであろう。そして、「斜めの家」の設計案は、最初の二案から大きく飛躍して最終形に至ったように思われる。「斜めの家」の設計時点で、世界の建築の潮流を強く意識していたことがとても重要だと考えている。

ここで、「行政庁舎」のスロープ空間と、「斜めの家」の類似点を記しておく。

「行政庁舎」は、横長の直方体形状の高層ビルであるが、スロープ空間が独立した立体としてその直方体の外側に飛び出している。そこには、小窓が沢山開いており、「斜めの家」の北側の外観と良く似ている。「行政庁舎」のスロープ空間は、「斜めの家」と同様に、折り返しのスロープ空間である。隣り合うスロープの間に壁があり、穴が開けられているところも同じである。内部の色も似ている。「斜めの家」のスロープ空間は、床が赤いじゅうたんで、壁はベージュ系の布クロスであり、「行政庁舎」のスロープ空間は、天井が赤く塗られており、壁は写真ではやや



上 コルビュジエ設計チャンディーガル「行政庁舎」(1958) 舟見倹二：撮影

下 コルビュジエ設計チャンディーガル「行政庁舎」(1958) スロープ空間
中野一敏：作図

ベージュっぽく見えるコンクリート打ち放しである。

最後に、ここまで私が読み解いてきた「斜めの家」の設計意図をまとめ、その重要性について記したい。

モダニズム建築の確立に大きな影響を与え、戦後の現代建築にも大きな影響を与えたコルビュジエ建築に、洋治自身を育んだ環境と体験に基づいて、そこに個人的表現を加えた「斜めの家」は、コルビュジエ建築を現代的に乗り越えようと意図した作品であり、藤森氏が書いているように、日本におけるコルビュジエ派の有名な四つの木造住宅を引き継ぐ名作であろう。

そして、私達上越の建築家に「斜めの家」は、偉大な先輩が上越の地に一つの住宅作品を作ることによって、上越の建築文化を創っていく方法を具体的に示したものであり、上越の現代の建築文化に直接つながった、いわば原点だと考えられる。

私自身も、上越の建築家として上越の建築文化を築いていくうえで、重要だと思う方法を渡邊洋治の「斜めの家」の設計の中に見つけることが出来るからである。

プロフィール
一九七五年吉川町（上越市吉川区）生まれ。
高田高校・横浜国立大学・同大学院修了。
日本建築学会北陸支部第二八回北陸建築文化賞〈作品部門〉受賞・LOCAL REPUBLIC AWARD 2019 佳作
建築家・一級建築士
ナカノデザイン一級建築士事務所代表
ナナメの会代表
新潟工科大学非常勤講師・上越総合技術高校非常勤講師

斜めの家
撮影：本誌編集